

かのりがわ

鹿乗川流域遺跡群 範囲確認調査

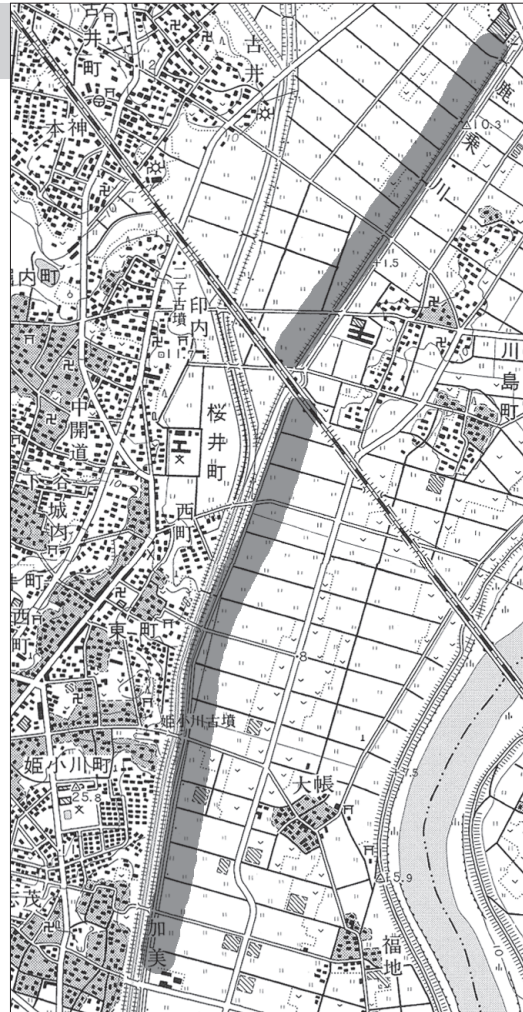
所在地 安城市桜井町・川島町・河野町・東町・小川町・姫小川町
 調査理由 鹿乗川河川改修工事に伴う事前調査
 調査期間 平成12年10月～平成13年1月
 調査積 1,300 m²
 担当者 川井啓介・竹内 睦・皆見秀久

調査の経過 調査は、鹿乗川河川改修工事に伴う事前調査として、愛知県建設部より愛知県教育委員会を通じた委託事業として、平成12年10月～平成13年1月に実施した。調査面積は1,300 m²である。

立地と環境 鹿乗川は安城市東部を南北に流れ、東には矢作川が並行し、西は碧海台地である。周辺の地形は、これらの河川による沖積地が形成され、新幹線以北では兩岸とも水田や畑地が広がり、新幹線以南の右岸は小規模な集落が、左岸は畑地が広がっている。

調査の概要 今回の調査では、新幹線以北を北地区、新幹線以南を南地区と2つの調査区に分けて実施した。全体的に現耕作土下は、近世以降と思われる暗灰黄色細粒砂、シルト層が20～40 cmほど堆積している。若干の遺物は出土したが、かなり摩滅している。

北地区 北地区では、調査の対象地内に21ヶ所のテストトレンチを設定した。T.T.A-1、T.T.A-3地点では、シルト層下に弥生時代後期から古墳時代にかけての遺物を多量に含む黒褐色シルト層が約30 cm堆積する。T.T.A-3からは畦畔を検出することができた。また、その下層からは土坑が検出された。T.T.A-4、T.T.B-1地点では、遺構・遺物包含層の確認はできなかった。T.T.A-4は下層に中粒砂が厚く堆積し、河川であったと思われる。T.T.B-1では、耕作土下から近代以降の攪乱を受けており、下層から出土した杭・横木も同時代のものと思われる。T.T.B-2～T.T.D-3にかけての地点では、いずれも遺構か遺物包含層が認められる。包含層はいずれも黒色または黒褐色のシルト層で、包含層の厚さは10～35 cm、弥生時代後期から古墳時代の土師器・須恵器がほとんどである。T.T.D-3では畦畔を検出することができた。T.T.D-4～T.T.E-2にかけての地点では、遺構・遺物包含層とも確認することができず、小片の遺物が極少量出土した。いずれの遺物もかなり摩滅しており、流れ込んだものと思われる。地表下150 cmには、腐植物層が確認された。T.T.E-3～T.T.E-6にかけての地点では、遺物包含層は認められないが、T.T.E-3では、地表下150 cmから横木・杭を確認することができた。T.T.E-5、E-6では畦畔と思われる遺構を確認することができた。T.T.E-4は、暗灰



調査地点 (1/2.5万「安城・西尾」)

黄色細粒砂下に灰色粘土が厚く堆積し、遺物・遺構とも確認することができなかった。

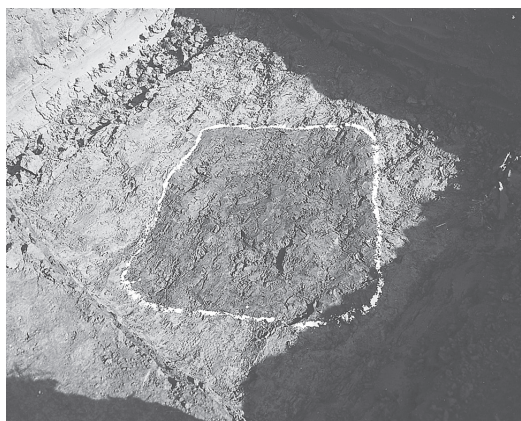
南地区 南地区では、調査対象地内に 22 ケ所のテストトレンチを設定した。T.T.6-1 ～ 6-4 の地点では、暗灰黄褐色極細粒砂層直下に弥生時代から古墳時代にかけての遺物を多量に含むシルト層が 20 cm ～ 30 cm 堆積し、直下または黒褐色シルト層をはさみ、溝状遺構、土坑を検出することができた。T.T.7-1、7-2 地点では、自然流路の堆積がみられ、特に T.T.7-2 では遺構・遺物包含層とも確認することができなかった。T.T.7-1 では上層の黒褐色シルト層を埋土とする土坑を検出することができた。T.T.7-3、7-4 地点では、地表下 45 cm ～ 80 cm ほどで厚さ 20 cm ほどの弥生時代後期から古墳時代にかけての遺物を含む黒褐色シルト層が堆積している。T.T.7-4 では、黒褐色シルト層の下層に薄い黄褐色中粒砂層をはさんで断面より土坑を検出することができた。T.T.8-1、8-2 地点では、地表下 60 cm ～ 70 cm ほどで遺構を検出することができた。T.T.8-1 では、耕作土直下にオリーブ褐色極細粒砂層、黄褐色極細粒砂層と続き、その下から溝状遺構を検出することができた。弥生時代後期から古墳時代にかけての遺物を含むシルト層はさらに下層であり、溝は近世以降のものと思われる。T.T.8-2 では、耕作土直下は近代以降の客土が堆積しているが、直下から土坑 1 基を検出することができた。土坑内から弥生時代後期から古墳時代にかけての台付甕が出土した。T.T.9-1、9-2、9-8 地点では、遺物包含層までの厚さが北へ行くほど薄くなっている。T.T.9-1 では、地表下 130 cm から遺物を多量に含むシルト層が 60 cm ほど堆積している。時期は弥生時代中期から古墳時代にかけての遺物である。下層の中粒砂層から弥生時代中期から後期にかけての土器が出土している。T.T.9-2 では、竪穴状遺構、土坑、溝状遺構を検出することができた。T.T.9-8 は地表下 50 cm ほどで黒褐色シルト層に達するが、厚さは 5 cm ほどで遺物の量も T.T.9-1、9-2 に比べ、少ない。下層は河川の流路の堆積となっている。T.T.10-1 ～ 11-1 にかけての地点では、遺物の出土はごくわずかであった。T.T.10-3 では黒褐色シルト層下から土坑を 1 基検出することができた。T.T.11-1 では、遺物を含む黒褐色シルト層がみられた。T.T.11-5 地点は、耕作土下からオリーブ褐色シルト層に暗褐色シルトがブロック状に堆積している層が 70 cm ほど堆積しており、近代以降の攪乱を受けている。T.T.11-3、11-4 地点では、耕作土直下に、にぶい黄褐色シルト層が 30 cm ほど堆積し、その下は河川の流路の堆積となっている。T.T.11-4 では、にぶい黄褐色シルト層下の断面より土坑を 2 基検出することができた。T.T.12-1、12-2 地点では、地表下 60 cm ～ 90 cm ほどに弥生時代後期から古墳時代にかけての遺物を含む黒褐色のシルト層が堆積しており、T.T.12-1 より北の T.T.12-2 の方が浅くなっている。T.T.12-1 の包含層は厚く 80 cm ほどで、その下層は中粒砂である。中粒砂の直上からは多量の土器が出土している。T.T.12-2 の包含層の厚さは 40 cm ほどであるが、完器に近い土器が多数出土している。いずれも遺構を検出することができなかった。

まとめ 以上の結果、調査地点は沼沢地または河川と微高地が入り組んだ場所であり、遺構・遺物包含層が確認されたトレンチ周辺は微高地にあたり、遺跡の種類としては集落跡と考えられる。また、T.T.E-3 ～ T.T.E-6 や T.T.A-3、T.T.D-3 で畦畔が検出されたように、古代以降の水田域が周辺に展開しているものと考えられる。遺構・遺物包含層とも確認できなかったトレンチ周辺は、河川もしくは沼沢地であったと思われる。

(川井啓介・竹内 睦・皆見秀久)



T.T.12-2 (西から)



T.T.10-3 (西から)



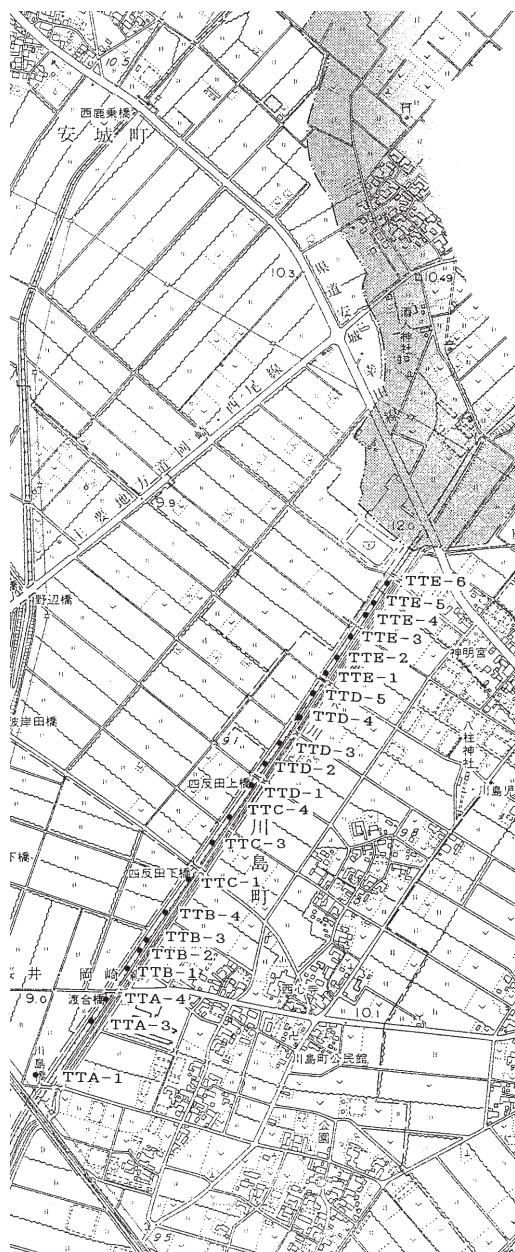
T.T.9-2 (西から)



T.T.8-1 (南西から)



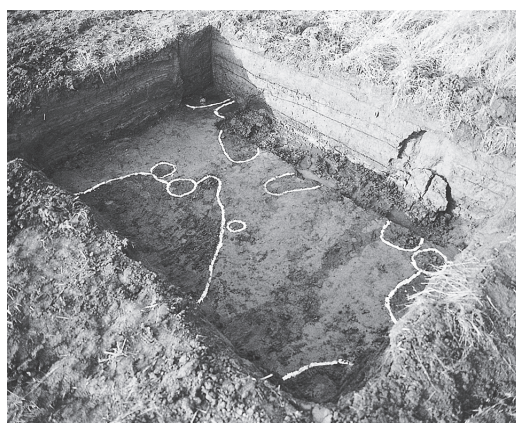
南地区調査地点位置図 (1:1,500)



北地区調査地点位置図 (1:1,500)



T.T.D-2 (西から)



T.T.D-1 (南西から)



T.T.C-1 (南西から)



T.T.B-4 (北西から)